

## GBIFを通じた生物多様性情報の世界への発信 収蔵庫標本を世界中で共有する

ひとはくが収蔵する標本は、収蔵庫で保管されているだけでなく、デジタル情報として全世界に発信されて、様々な研究活動や環境保全に活用されています。例えば、新種を記載するために関連する標本を探す場合、目的の生物名や場所を入力すれば、世界中の情報を容易に探すことができます。また、過去に絶滅危惧種が生息していた場所や外来生物の分布情報も容易に検索できます。

データ発信の基盤となっているのが、地球規模生物多様性情報機構 (GBIF: Global biodiversity information facilities) と呼ばれる世界的なネットワーク組織です。世界中の博物館や大学が共通ルールのもと、データ共有することで、地球上の生物多様性情報が集約されています。当館からは、植物標本約140719件、昆虫標本245987件、鳥類標本12134件、魚類底生動物13514件が公開されています。2017年～2021年にかけては、植物標本25000件、昆虫標本40000件のデータ整備を行いました。このデータは世界中からアクセスできます。

こうした情報発信を進めるためには、仕組みづくりや運



営も大切になります。日本国内のネットワークづくりにおいては、GBIF設立当初から当館も運営メンバーの中核を担い、システム設計や博物館ネットワークの構築、各種講習会の開催に参画しました。例えば、当館研究員の技術的な強みを生かして、標本画像のデジタル化や地理情報システムの利用に関する講習を行い、国内の学芸員や研究者の能力向上にも努めています。

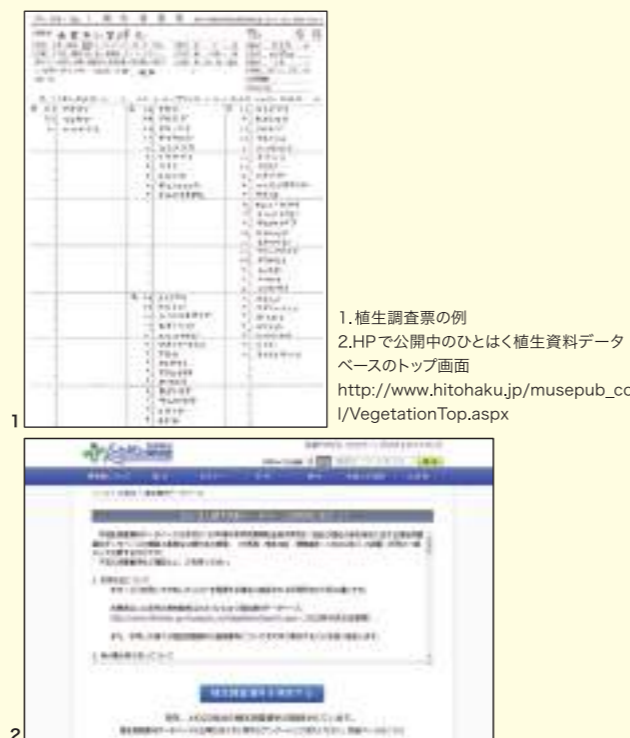
1. 当館の植物標本の採集地点に関する地図。日本全域をカバーしている  
<https://www.gbif.org/ja/dataset/8682e420-f762-11e1-a439-00145eb45e9a>  
2. 2020年1月に実施された高精細標本画像の撮影に関するワークショップの様子  
詳細は下記  
<https://www.gbif.jp/v2/about/jbif.html>

## 植生調査資料

### かつての自然の姿を後世に伝える ～植生調査資料のアーカイブ～

ひとはくでは、地域でどのような植物が分布していたかを後世に伝えるために、植物のさく葉(押し葉)標本などの“実物”を多数収蔵しています。しかし、これらの標本だけでは、森や草原といった植生を形づくる植物がどのような種の組み合わせ(種組成といいます)で生育しているかまでは伝えることができません。このような植生の種組成を調査し、解明する学問に植物社会学があり、植物社会学的調査法による調査結果は植生調査票(図1)という定型紙に書き留められ、室内で保管されています。

ひとはくでは、開館以来30年わたり行ってきた兵庫県内の植生調査で得た資料や、県内の著名な植生研究者から寄贈された資料を多数収蔵しています。さらに、2015年からこれらをデータベース化して当館HP上で「ひとはく植生資料データベース(図2)」として公開し、希少種情報を除き、どなたでもご覧いただくことができるようにしています。2022年4月現在、14323地点の資料(最も古いもので1962年の資料)を登録し、ひょうごの植生の変遷を知る上



で欠かせないものとなっています。今後も植生調査を精力的に進めるとともに、植生調査資料の収蔵・公開に取り組み、ひょうごの過去・現在の植生の姿を後世に伝えていきます。

1. 植生調査票の例  
2. HPで公開中のひとはく植生資料データベースのトップ画面  
[http://www.hitohaku.jp/musepub\\_col/VegetationTop.aspx](http://www.hitohaku.jp/musepub_col/VegetationTop.aspx)

## 資料を活用したトイレ改修 前代未聞! トイレで楽しむ標本資料

これまで、ひとはくのトイレは暗い雰囲気が漂い、怖くてひとりで用を足せない子どもがいるほどでした。そんな中、2019年に県の訪日外国人客誘致策の一環として和式便器の洋式化工事を行う機会に合わせ、館内すべてのトイレを全面リニューアルしました。

展示室にはたくさんの標本資料がありますが、情報量が多すぎて来館者が素通りしてしまうこともあります。そこで、「トイレの中こそ標本資料をゆっくり楽しんでもらえるのでは?」という着想から、本館2,3階トイレに、標本資料を展示する壁面を設ける計画をつくりました。また、男性用と女性用で異なる標本資料を展示し、あえてどちらかしか見られない状況をつくり出すことで、来館者同士に自然とコミュニケーションが生まれるよう工夫しました。

湿気や盗難への対策、照明の設置方法など標本資料にとってトイレは過酷な環境です。博物館業界として前代未聞の改修計画でしたが、乾式床材や鍵付のガラス壁面の導入、標本の色彩を損なわず影がちらつかない棚下用LEDライン照明の設置など、施工業者と幾度も調整を繰り返し、



実現することができました。改修以来、トイレ内外で「え?これホンモノ?」「恐竜のうちの化石なんかあるんや!」など明るい声が響きます。トイレという特殊な空間で見る標本資料には、新たな発見や驚きがあるようです。標本資料のほかにも、実物大の丹波竜に覗かれながら用を足せるトイレ(エントランスホール)など見どころ満載です。ぜひトイレでゆっくり楽しんでください。

1. 家具埋込式の展示スペース(2階女子) 2. 便器の上に並ぶ色鮮やかな岩石標本(2階男子) 3. 実物大丹波竜のタイル画(エントランスホール)

## 小林コレクション

### 絶滅鳥類ドードーを含む 日本有数の大型鳥類コレクション

小林コレクションは、(故)小林桂助氏にご寄贈頂いた鳥類標本です。ご寄贈頂いた鳥類標本は、主に研究に用いる剥製(仮剥製)が11207点、展示に用いる剥製(本剥製)が102点、卵標本が2399点、および巣の標本が424点であり、寄贈点数は合計14132点におよびます。日本有数の大型鳥類コレクションの一つです。

小林コレクションには、大変貴重な標本がいくつもあります。その一つが、絶滅鳥類ドードーの骨格断片標本です(図1)。ドードーはインド洋のモーリシャス島に生息していた飛べない大型鳥で、17世紀に絶滅したとされています。今から4世紀も前に絶滅したため、当館が収蔵する鳥類標本の中では「最古の標本」です。

小林コレクションは、鳥類学の発展にも大きく貢献しています。その代表的な書籍が世界的に有名な「The eggs of Japanese birds」(1932-1940)と「原色鳥類図鑑」です。「The eggs of Japanese birds」は16冊に分けて刊行され、当時の国内に繁殖した208種(および亜種)のうち、



200種(および亜種)の卵を原色で図示し、国内外から非常に高い評価を受けました(図2)。また、「原色鳥類図鑑」は、日本の鳥類学者をはじめ、鳥類観察者にも、バイブルとして長年にわたり親しまれてきた名作です(図3)。

小林コレクションを超える大型の鳥類標本が今後に寄贈されることはおそらくありません。小林コレクションは、人と自然の博物館、兵庫県、日本、そして、世界にとって、極めて重要な大型鳥類コレクションです。

1. 絶滅鳥類ドードーの骨格断片標本  
2. 世界的に有名な書籍「The eggs of Japanese birds」  
3. バイブルとして親しまれた書籍「原色鳥類図鑑」